

武藏野日曜集会

## 復活のキリスト

——マルコ伝第16章1～8節——

1971年12月5日  
小池辰雄

驚天動地の出来事 キリストの靈生 御靈なるキリスト 靈生の永遠的現実 彼は此処に在さず キリストは甦った 平安なんじらに在れ 靈骨・靈肉 新生はまた神生なり

### 【マルコ16・1～8】

<sup>1</sup>安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、<sup>2</sup>一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。<sup>3</sup>誰か我らの為に墓の入口より石を<sup>まろ</sup>転ばすべきと語り合いしに、<sup>4</sup>目を擧ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。<sup>5</sup>墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。<sup>6</sup>若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦りて、此處に在さず。視よ、納めし処は此処なり。』<sup>7</sup>然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ『汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん、曾て汝方に言い給いしが如し』<sup>8</sup>女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。

### ●驚天動地の出来事

こないだ、十字架のキリストのお話をいたしました。我々の信仰はもちらん十字架で終わるわけではない。

「キリストの復活がなかつたならば、我々の信仰は空しい」

とパウロがコリント前書15章で言つてゐるとおりです。使徒たちも、彼らが立ち上がつたのは、この復活のキリストに出会つたからです。

「キリストの復活」

と書かないで、

「復活のキリスト」

と書いたのは、もちろん、具体的な活けるキリストを相手にしていくことであるから、

「キリストが復活した」

という一つの出来事ではなくして、



「既に復活しているところのキリスト」

という重点がそこにかかるわけで、こういう題にした。しかし、とにかく、十字架にかかりたあと、キリストが今度は復活するという一つの具体的な事実がまず先にあるわけです。そして、それから、復活のキリストということになる。キリストの復活ということを先ず見ていかなければならないわけです。マルコ伝16章を開きます。

<sup>1</sup>安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹ぬらんとて香料を買い、<sup>2</sup>一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。<sup>3</sup>誰か我らの為に墓の入口より石を転ばすべきと語り合いしに、

<sup>4</sup>目を挙ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。

非常に簡潔に、しかし、ドラマチックに書いてある。何はさておき、先ずいの一番に走つていったのはマグダラのマリヤである。マルコ伝はそのことを非常にはつきりと書いてある。マタイ伝にしてもそろなんです。<sup>28</sup>章1節から見ますと、

「<sup>1</sup>さて安息日おわりて一週の初の日のほの明き頃、

安息日はもちろんユダヤの安息日です。金曜の夕方から土曜の夕方ですから、「一週の初」というのは日曜日のこと。我々のいう安息日です。けれども、実は我々の日曜は復活の日なんで、安息日はユダヤ的に言えば、むしろ土曜の方が安息日です。ヨーロッパでは、もうほとんど金曜の午後からあまり仕事をしないけれども。

マグダラのマリヤと

ここもやはり一番先に書いてある。

他のマリヤと墓を見んとて來りしに、<sup>2</sup>視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転ばし退け、その上に坐したるなり。<sup>3</sup>その状さまは電光いなずまのごとく輝き、その衣は雪の如く白し。<sup>4</sup>守まもりの者ども彼を懼れたれば、戦おののきて死人の如くなりぬ。」(マタイ28・1～4)

私は、このマタイ伝のこの記事を見ると、単なる地震とは思わない。これは靈震です。神の靈が震動させた。普通の地震ならば、全般に響いているわけですから、またマルコ伝にも書いてあつてもいいんですけども、特にマタイ伝に天使との関わりにおいて書いてある。ローマの番兵が大勢でその岩穴に石で蓋をしたらしい。それはとても数人くらいでは動かすことのできる石ではなかつたらしい。それがこういうことである。

<sup>5</sup>墓に入り、右の方に白き衣を著きたる若者の坐するを見て甚く驚く。

というのは天使のことです。マルコ伝というのはなかなか天使のことを書かないけれども、初めてここで――しかも、それは「天使」とは書かない――「若者」なんて書いてある。

<sup>6</sup>若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、此處に在さず。

それはもちろん、弟子たちの中の若者でないことは分かりきつてます。これは天使です。



視よ、納めし處は此處なり。然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ  
実に愉快な若者ですね。非常に権威がある若者です。

「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼處にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言  
い給いしが如し」<sup>8</sup>女等いたく驚きをののき、墓より逃げ出でしが、懼れた  
れば一言をも人に語らざりき。

とにかく、この時も、あまりの出来事のために、みんな、番兵は死人のごとくにぶつ倒  
れてしまふし、行つた女人たちは、驚き懼れ戦きというわけです。正に、驚天動地と言  
いますね、天が驚き地が動く。驚天動地の出来事です。イエスという方が何と熾くなる生  
命の人であるか。

### ●キリストの靈生

本当の生命というものは正に靈的なものなんです。靈的でないものは生命ではない。我々  
はご飯を食べたり、おみおつけを飲んだり、肉体はとにかくそれで生きています。それもひ  
とつの生命です。肉の生命。けれども、これはどうせ百歳になるかならないかで、みんな  
朽ちてしまう。衰えてしまう。ところが、本当の生命は衰えない。本当の生命は正に靈が  
持つてある生命です。これを靈生といいます。あとで読みますけれども、私はかつて「曠愛文庫」  
の第4号に「キリストの靈生」という詩を書いた。私たちの生命は靈生であると。

いつも書きました。「ひと」は靈ひとが止まつてゐるのを「靈止」という。これは大言海に  
書いてある。私はこれを知ったときに本当に驚き、そして喜んだ。素晴らしいなあと思つた。  
靈が止まつていなければ、ひとではない。ひと靈止でないひとがたくさんいるわけだ。

今朝もテレビで、「十代と語る」とかいう番組をやつていた。もう、癪しゃくにきわつた。

「何をぬかすか。もつとしつかり勉強しろ。勉強もしないで、空回りで考へるなんて、

何が考へることだ」

と、まず言いたいですよ、正直。そして、「自由」というものをまず勉強してもらいたい。  
昔の人たちがどういうことを、哲学者たちが本当に探究してきたか。それもやらないでお  
いて、なにが「自由」かと。今は、「永遠」とか、「無限」とかいうような、そういう深い豊  
かな感情がない。瞬間的な現実主義です。永遠とか、無限というような情感を持たなかつ  
たら、自由なんてものは出てこない。

それは何と言つたつて、先生（教師）の責任なんです、小学校から大学に至るまで。先生  
が本当の哲学することを教えてやらないし、方向付けないからいかん。私は小学校4年く  
らいのときに、

「人間は万物の靈長である」

と聞いた。万物の靈長たるその実質と光栄とをすっかり捨ててしまつたようなものだ、20  
世紀の後半なんていうものは。



靈が止まっている。だから、そういうひとが本当に靈生を持つている。これが靈止である。あなた方は、「人」という字を「靈止」と書いたらいいよ。やっぱり、昔のひとは偉いですよ。精神的、靈的なものは昔を尋ねなければダメです。

キリストこそ正に靈止なんです。神の靈が止まっている靈止。「止まる」は「宿る」と同じことです。

### 「神の懷<sup>ふところ</sup>に在りし独子<sup>ひとりご</sup>」

という。靈がその中に宿っている。肉体を支配している。

「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」

ではない。

「健全たる精神は健全なる肉体を支配していく。肉体を支配して健全にしていく。健全なる肉体は健全なる心の中に包まれている。」

中心は靈である。その靈生を証したのがキリストの復活なんです。

「前のイエスが、十字架に架かつて死んだと思ったが、息を吹き返した」

なんていうのではない。もつと素晴らしい靈体をもつて完全に靈が化体して現ってきた。  
からだ 体に化す。靈が体を持っていく。

### ●御靈なるキリスト

「受肉」 というのがそうなんだ。もともとそうなんだから。「ロゴス」なる靈的キリストが——「キリスト」 というのは靈界のロゴスとして存在していた。アブラハムよりも先に神と共にあつたところのキリストが——ナザレのイエスとして地上にやつてきた。

大体、「復活のキリスト」なんていう言葉は本当は意味をなさないんだ。もともと、キリストはキリストで、永遠のキリストなんです。現象面でただ変わっただけのはなしです。現象面でナザレのイエスとなり、そして今度は、新しくイエスが復活したような姿で出でました。けれども、本来はそれはみんなキリストなんです。

キリストがイエスとして受肉している。肉を受けているんだから、肉を受けている本体は何かというと、靈なんだ。

### 「受肉のキリスト」

なんていうけれども、ナザレのイエスは靈が中心に動いているところの、もう既に靈体的な人物なんだ。けれども、もちろん我々と同じ肉を備えていらっしゃる。だから、一切の感情を持つている。弱さをまた、どん底まで持つている。その弱さを持つているけれども、弱さの中に強さがある。靈という強さが。

この靈がいつも言っている。何を言っているかというと、

「汝の聖意をなさせたまえ。どうぞ、この私を通して、やつてください」

と言っている。そして、神の靈がしそつちゅうこのキリストの靈に展開しているわけです。



そして、我々の人間の弱きに勝つて、我々を救いへともつていく、贖いの実質を備えておられる。

我々は、なるほど、死に至るまで罪びとですよ。けれども、その中にこの靈なるキリストが——これは要するに御靈です——御靈なるキリストが在る限り、どんなに滑つても転んでも躓いても、必ず勝つていく。必ず前進していく。だから、私は絶望を持たない。あなた方もそう。普通なら、

「絶望、失望、お終いはやけくそ」

なんていうことになる。そのやけくそがなくなってしまう、どんなことがあつても、御靈が在るならば。「信仰」ではないですよ。

「御靈がなければ、クリスチヤンでない」

とパウロがはつきりと言つてゐるんだ。それ以前の、御靈が来る前のペテロは——まずキリストの横にいたから非常にその感化を受けていたけれども、いわゆる感化だよね——けれども、滑つたり転んだりで、それはどうにもならん。ところが、御靈が来たらば、イエスは天界にいらつしやつても、もう直々の世界です。

### ●靈生の永遠的現実

イエスは正に、靈が止まつてゐる靈止で、靈生を持つておられたから、十字架の贖罪の大業を果たしたらば、この靈生が現象せざるを得ない。靈生の現象を、ただ「復活」と言つてゐるだけの話です。靈生がそこにはつきりとまた顕現してきました。

ところが、みんなキリストの靈生が分からぬんだ、イエスというひとはそれほどの素晴らしい靈止だということを、イエスが地上にいた時に、みんな一緒にご飯を食べたり一緒に歩いたりした時に、それが分からぬ。見えない。見るとも見えず、聞けども聞こえず。聞いていても、中身が分からぬ。

「しかし、今にお前たちは私の言つたりしたりしたことが分かる時がくるよ、

**御靈が来れば**

と、キリストは言つておられる。だから、聖書は、御靈が来なれば、いくら聖書を研究したつてダメです。聖書研究会なんてものは何年続けたつてダメですよ、御靈が来ない限り。もうこれははつきり、權威をもつて言います。

だから、私たちが御靈をいただいて、この福音書を読むと、何と素晴らしい現実、だろうか。読むことが直ちに生命となり、読むことが直ちに祈りとなる。あなた方は祈るときに——瞑想の祈りもいいよ、私ももちろん闇の中で瞑想して目をつぶつて祈るけれども——福音書を開いて、グーッと読みながら、直ちにそれが祈りであるという境地。読みながら、どんどんその世界に入つていく。それができなかつたらば、まだ本当の御靈の世界ではない。もう、そこらのキリスト教とは違うんですからね、皆さん。



「この頃、無教会の先生方のものを読んでいます」

なんて、ある人から言つてきたけれども、何をぬかすかと。それはまあいいですよ。けれども、せつかく私の話を聞いてから、今ごろ

「無教会の先生のものを読んでいます」

なんて。早く卒業してくれなければ。私ははつきり言いますよ、何も遠慮なしに。内村先生でも、藤井先生でも、もちろん火花の散つているところがあります。けれども、この使徒たちの次元からはズレている。

皆さんには、キリストの靈生の永遠的現実の世界ですから。あなた方はもう、そういう境地に来ている。だから、私は君たちの将来を期して待つてあるんだ。生まれつきの才能や性格は、いいですよ、どうでも。もう一番根底の大重要なことはキリストですから。この靈なるキリストの生命です。甦りのキリストにぶつかつたら、私はもうやりきれんです、本当の生命がくるから。

これは、驚き怪しんだらダメです、驚き喜ばなくてはダメ。これはまだみんな怪しんでいます。弟子たちもまだダメなんだ。聖靈が来るまではダメなんだ。だから、一番最後に、昇天のキリストが、

「祈つて待つていろ。今にくるぞ」

と言われた。

天使が現れて

「驚くな」

と言つた。マリヤだつて初めは、キリストが生まれる時だつてそうなんだ。みんな靈的な次元に対しては、驚き怪しむんだよ。

●彼は此処に在さず

ルカ伝24章の始めの方から少し行きます。

「<sup>1</sup>一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。<sup>2</sup>然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、<sup>3</sup>内に入りたるに主イエスの屍體を見ず、<sup>4</sup>これが為に狼狽えおりしに、キリストは当然死んでいるものと思つていた。ところが、いなかつたので、うろたえたといふ。いなかつたら、うろたえてしまつたりして、これは全然ダメです。視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。<sup>5</sup>女たち懼れて面を地に伏せたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ねるか、

はつきりしてますね。

「なんで死んだものの中に生ける者を尋ねるか。キリストは生きてござるぞ」



と。ゲーテさんも言つたでしょ。

「我々はこの地上の生涯が終わつたら、大自然が次の存在の形態を与えてくれると私は信じている」

と、74歳くらいのゲーテがそう言つてゐる。ゲーテという人はそういう大きな、次の世界の生というものをちゃんと信じてかかつてゐる。ゲーテはキリストだつて、ちゃんと掴んでいますからね。あとで、『ファウスト』の「キリストは甦つた」というところを読んでもいいけれども。

「生きている」と、これは天使がはつきり言つた。

<sup>6</sup>彼は此處に在さず、甦えり給えり。<sup>なお</sup>尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。

忘れてしまつてゐるんだ、みんな。大体、空耳で聞いてゐるからね。想い出そうとしたつて、想い出せない。

「あつ、そんなことをおつしやつたかね」なんて。

<sup>7</sup>即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり。

と、三度おつしやつた。三度まで言われたのに、それを、まさか忘れはしなかつただろうけれども、やつぱり本当に受けとつていられないわけだね。受けとつてないから、

「キリストは甦つた」

と言つても――

「やつぱり、そňか。キリストはうそをつきはしないんだから」と言うかと思うと――ところが、

「やつぱり、そňか」

とこないんだからね、いつまでたつても。何か新しくぶつかつたようなことみたいに。「甦るべし」は

「甦らざるを得ない」

ということです。

<sup>8</sup>ここに彼らその御言を憶い出で、<sup>9</sup>墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。<sup>10</sup>この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、<sup>しかも</sup>而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。

一番先にいつも、「マグダラのマリヤ」が書いてある。

<sup>11</sup>使徒たちは其の言を妄語<sup>たわごと</sup>と思ひて、信ぜず。

聞いているんですよ。聞いていながら、まだ「妄語と思つて信じない」というわけですから。



<sup>12</sup>ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつゝ帰れり。」（ルカ24・1～12）

まあ、正直に書いてあつていいですよね、聖書は。あまり飾られては困る。

そして、マルコ伝16章9節からいくと、

<sup>9</sup>一週の首の日の拝暁ひとまわりはじめ、イエス甦さきえりて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、前にイエスが七つの悪鬼を逐いだし給いし女なり。

ということが書いてある。

### ●キリストは甦った

あのゲーテの『ファウスト』の句に、

「朽ちゆく胎から、

キリストは甦った。

この地の世界はみな朽ちる。すべてのものが滅びゆき、朽ちてゆく。そういつた「滅びの懷の中から」というのは、「大地の中から」ということ。

諸々の絆きずなから、

喜んでお前たちは自分たちを解き放せ。

一切の束縛から解き放せというのは、キリストの生命が初めて我々に本当の自由を与えるのであつて、キリストのこの永遠の生命にぶつからないでいて、「自由」なんて言つたつてダメです。空回りしてしまう。あなた方は、言うべきときには、はつきり言わなくてはダメですよ。私たちの信仰は絶対に観念でないから。一番現実中の現実です。

活動をもつて彼を讃め讃さんめる人

即ち、働くことが讃美である。私たちは、いわゆるアクセサリー信仰ではどうにもならん、このキリストの実力を持つていなかつたら。靈生の実力をもつて、靈生は人を担い上げる生命ですから。担い上げの生命ですから。それを愛という。感情的な愛ではない。担い上げの生命というものをもつて対していく。

「クリスチヤンは自主で何者にも隸属しない。しかしながら、一切の者に隸属する」とパウロもルターも言つたのは、「隸属」という言葉が躊躇になるけれども、「仕える」ということです。仕えるということは、逆に言うと、「担う」ということです。もっと力強い言葉でいうと、「仕える、奉仕する」ということは、「担う」ということなんです。集会でもそうでしょ。黙つて、どしどし自分でもつて進んでいろんなことをやつている人は、その集会を担つている人なんです。そういう担いの態勢、これが人を打つ。言葉ではない。

キリストの生命がくれば、一晩くらい寝なくたつて、祈つて「らんなさいよ、力が来るから。

「どうも今日は睡眠不足で、今日は何時間しか寝ないから、明日はそれをプラスして何時間寝ようか」



なんてダメだよ、そんなのは（笑）。電車の中でもどこでも、5分でも10分でもグツと寝れる。もつと自由にならなければダメですよ。ドイツ語の言葉に

「始めて働いて、それから遊ぶ」

という言葉がある。今日は始めて遊んでしまつたら、後から働いたらいい。それだけの気魄をもたなくては。この御靈の世界にくると、柔軟で自在な人になる。キリストの生命といふのは何と素晴らしいか。何もないときには、水だけを飲んでいれば大丈夫ですよ。

「水だけでは栄養がどれだけ足りなくなる」

なんて、そんなことではない。もちろん、水ばかり飲んで、一生それでいくわけにはいきませんよ。けれども、時に臨んで、それだけの自由な——水を葡萄酒に変えるようなキリストだから——水を飲みながらキリストを念じていれば、腹の中でそれが凄い力になつてくる。それくらいのことを時々、経験していかなくてはね。

あなた方はいつか無錢旅行をやつたでしょ。あれでかなり経験したでしょ。なにも、妙なことをしようつちゅうやつてろなんて言つてているのではない（笑）。しかし、行き詰まる時に行き詰まらない人になつてください。いわゆる計算なんかしなくなつて大丈夫ですから。

キリストの愛を証しする人、

兄弟のよしみをもつて食を分ち、

リンゴが一つあつたら、

「さあ、君、ひとつを分けて食べよう」

と言つて、お互に分けて食べる。これは一つ分しかないから、お前にやるわけにいかんなんていうのではダメだ。分けて半分ずつ食べると、かえつて楽しい。

宣教しながら旅をし、

喜びを約束しながら行くよくな、

そういうた人たちに

このお師匠さん（キリスト）は近くにおゐるぞ。

彼はそこに在る。」

「キリストが近くにいるのは、そのような身証する人たちに近いのだぞ。身をもつて証しする人たちに、そういう人たちに近いのである」

ということです。私は、『ファウスト』のこの句は非常に好きなんです。

## ●平安なんじらに在れ

今度は、ルカ伝24章13節から35節まで、「エマオ途上」のことが書いてある。旅をしているエマオ途上の二人に、もう一人、知らない人が現れてきて会話を始めた。

「あなた方は悲しげな顔をしているが、どうしたんだね」

「お前は、エルサレムに宿つて、この頃起こつた事を知らないのか」



と。

「どんな事だね」  
「ナザレのイエスのことだ」

<sup>19</sup>……ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて業にも言にも  
能力ある預言者なりしに、<sup>20</sup>祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之  
を付し遂に十字架につけたり。<sup>21</sup>我等はイスラエルを贖うべき者は、この人  
なりと望みいたり。

大体、「贖うべき者」と言つたつて、贖いの意味が全然分かっていないからね、こういうこ  
とを言つてはいる。全く現世的な意味の贖いのことを言つてはいる。

然のみならず此の事の有りしより、今日ははや三日めなるが、……  
と、ずっと語つた。そうしたら、それを聞いていたイエスは、

ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。  
<sup>26</sup>キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の榮光に入るべきならずや。」（ルカ

24・19～26）

と、逆にやつつけた。いくら噂うわさをしていても、上の空の噂です。ところが、イエスはズバ  
リと言われた。自分がこの隕りのキリストですから。

「愚かにして」

というのは、

「不信にして」

ということで、頭が悪いという意味ではない。不信にして心鈍き者よと。一向に受けとれ  
ない。聖書読みの聖書知らずが、たくさんクリスチヤンの中にいるわけだ。これがキリスト  
にこういうようにやられるわけだ。

「ああ愚かにして心鈍き者よ」

と。

「心鈍き学者どもよ」

なんて言われて、学者がやられる。神学者がやられる。

それで、食事をして、パンを裂いたところが、その時に彼らの目が開かれて、イエスで  
あることが分かつた。その瞬間にキリストは消えてしまった。彼らが驚いて、イエスに目  
を見張つてはいる姿は、「曠愛新書」第6号の表紙に印刷したレンブランドの絵がよく表して  
いる。レンブランドはあの後すぐ、キリストが居ないのを、光だけが来ているのを描い  
てはいる。あれはおもしろい。光だけで、キリストが見えなくなつて、その二人がそこにしょ  
んぼりしているのを描いてはいる。

「<sup>32</sup>かれら互いに言う『途みちにて我らと語り我らに聖書を説明し給えるとき、我  
らの心、内に燃えしならずや』<sup>33</sup>斯て直ちに立ちエルサレムに帰り見れば、



十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、<sup>34</sup>『主は實に甦えりて、シモンに現れ給えり』<sup>35</sup>二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事を述べた。

そうすると今度は、そこへキリストが入ってきた。

<sup>36</sup>此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言い給う。」（ルカ24・32～36）

このときに、「平安」と訳したのは大変結構なことです。「平和」と訳してはいかん。ルカ伝2章の、

「いと高き所には栄光、神にあれ。地には平和（平安）、主の悦び給う人にあれ」（ルカ2・14）

これは「平和」ではなく、「平安」と訳さなければいかん。私はそのことにしばらく気がつかなかつた。けれども、あれは「平安」と訳さなければいかん。キリストが現れたんだから、このキリストとの交わりが本当に平安を与える。これは「平和」でない。「平安」です。日本語はここではつきりと言ひ換えなくてはいかん。平安があるところに初めて人間の間の平和がある。

「汝のうちに安らうまでは安きをえず」

というこの「安き」は平安です。

皆さん、いろいろな問題があるでしょう。就職問題、結婚問題。あなた方としては何としても、もうこのキリストとの縦の平安、これがなかつたならば、どんなに良さそうにみえてもダメです。これがあれば、どんなにそれが危険のようにみえても、乗り切っていく。それだけは、我々の魂の世界はごまかしがきかんですから、自分ではつきりわかる。

### ●靈骨・靈肉

『<sup>37</sup>かれら怖じ懼れて見る所のものを靈ならんと思ひしに、<sup>38</sup>イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、

戸が閉まっているのに、イエスが入つて來たからね。

<sup>39</sup>我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、<sup>40</sup>斯く言ひて手と足を示し給う。

マグダラのマリヤがキリストに触ろうとしたら、触るなど一遍おつしやつた。今度は、触つてみろと言う。

靈には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見る<sup>41</sup>ことし』（ルカ24・37～40）

まあ、驚くべき言葉です。「靈には肉と骨となし」で、私はすぐ来る言葉がある。

「汝はわが骨の骨、わが肉の肉なり」（創世記2・23）

という言葉です。この「肉と骨」は、イエスがかつて持つていたところの「肉と骨」とは



違う。これは滅びない骨であり、滅びない肉なんです。我々のこの肉体はいつか滅びます。けれども、キリストの、今示したところの骨と肉は靈骨、靈肉なんです。

パウロがコリント前書15章で

「血氣の体あり、靈の体あり」（コリント前15・44）

と言つたでしょ。あの「靈の体」をもつてキリストは現れてきた。

牧師さんや神学者がこれに躊躇んです。

「こんなことを書いてあるが、これは神話だ」

なんて。私は、或る聖書学研究会——今の叢々たる一流の学者の群です——そこに私はいたけれども、みんなが笑つたから、

「もう、私はあなたの方の群から出る」

と言つて出てしまつた。本當だよ。私はその点では絶対に使徒の角度にいきますからね。学者が何だというんだ。

そういう靈骨靈肉をもつてイエスは現れた。キリストにしがみついてくださいよ。この

イエス・キリストの靈肉靈骨をもつて、

「このようにして変幻自在だぞ。幽靈ではないぞ」

と。靈界にこの靈肉靈骨をもちながら、彼は天界にまた昇つてしまふ。我々の一切の判断を超えたところの驚くべき実在ですから。

「この実在がもし、ないならば、私たちの信仰は空しい」

とパウロが言つた。

「いかにもして甦らんがために」

と、パウロが幾度も言つてゐるではないですか。ヨハネ默示録を見ても、そうです。<sup>あきら</sup>諦めの世界ではない。どこまでも、イエス・キリストの生命をもつて、この靈骨靈肉をもつて、私たちは

「汝イエス・キリスト、主さま。あなたは私の骨の骨、肉の肉、靈の靈である」

と、これは本当に言えなくてはいかん。そうしたらもう、天下無敵ですよ。泥の、土の器の私の中に、この燃えているところの、本当にキリストの生きているところの、これが現実なんです。だから、誰が何と言おうと、私は絶対に全世界を相手にしても、この信仰からズレるわけにいかん。

この靈骨靈肉の、

「これわが骨なり、肉なり」

トイエスが言われた、實にこれこそが私たちの信仰のもの凄いひとつのが根拠であると言つてもいいものを、それを笑われたら、そんな群にいるわけにいかんですよ。

「キリストはわが骨の骨、肉の肉、わが靈の靈なり」

という、靈的な最もそれ自身が永遠の質を持つたところの事態。



「血氣の体あり、靈の体あり」

という、その靈の体が既に来ているんです、内的に。死んでから先ではない。既に来ている。だから、

「原子爆弾が爆発しようが、水素爆弾が爆発しようが、どつこい、この生命は死にませんよ」

と言うわけです、肉体は散るでしようが。私みたいなおよそいわゆる靈的でない人間が、どうしてこんなことになつたか自分で不思議でしようがない。何も私は無理しているのではない。本当なんです、これは。

### ●新生はまた神生なり

それだから、

「そこに何か食べるものがあるか」

と言つたら、

「<sup>41</sup>かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言い給う『此處に何か食  
物あるか』<sup>42</sup>かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、<sup>43</sup>之を取り、その前にて食  
し給えり。」（ルカ24・41～43）

これは嘘うそごとですか。聖書にこんな嘘うそごとを書いていいんですか。これをみんな笑つた  
んだ。こういう現実は人間の一切の科学を逆に笑つてているわけです。

ゲーテも『ファウスト』の中で言つているではないですか。

「諸々の科学をやつてみたけれども、私は何も知らないということが分かつたと言  
うよりか仕方がない」

と。世の中のことはすべて神秘です。

「いかに？」

といふことは或る程度までは分かります。けれども、

「何故に？」

となつたら、もうこれは分からん。

「万事は不可解」

と言うのが本当だよ。これは神秘です。神が秘めて置かれ給う。

「神秘」

とは、言葉の本来の意味では、神が秘めて置かれることです。それは最後の日に、新天新  
地の最後の日に明かされる。

だから、「神の幕屋」の最後の日のことをとにかく主題にして、私は生きているんだ。

「<sup>44</sup>また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕ともに在りし時に語りて、我に  
就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡すべての事は、必ず遂げら



るべしと言ひし所なり』<sup>45</sup>ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて  
言い給う、<sup>46</sup>『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の  
中より甦えり、<sup>47</sup>且その名によりて罪の赦ゆるしを得さする悔改くいあらためはエルサレムよ  
り始まりて、もろもろの国人に宣伝のべつたえらるべしと。<sup>48</sup>汝らは此等のことの証  
人なり。<sup>49</sup>視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力ちから  
を著せらるるまでは都に留れ』（ルカ24・44～49）

「御靈の力をさせられるまでは都に留まつていろ。集まつて、しつかり祈つて  
いろ。そうしたら、変わるぞ」

という約束をされて行かれてしまった。ルカ伝のこここのところは非常に大事です。エマオ  
途上の二人と遭つたところよりか、後の方が大事です。

私たちにとつては、この正に甦りのキリスト、即ち靈生のキリストが私たちの信仰の現  
実のすべてなんです。甦りのキリストと共に私たちは甦りの生命に与かつてゐる。新生に  
あずかつてゐる。新しい生命に。

「人、新たに生まれば、天國人にはなれませんよ」

とキリストが言われる。新生はまた神生なりといふ。神の生命です。

どうぞ、皆さん、いろいろな相対的な問題や現実でもつて——顔を見ていると分かるん  
だよね——

「ああ、何か少し雲がかかつてゐるな」

と。まあ、それはいいさ。けれども、もうひとつ奥で、もう少し見ていると、

「ああ、やっぱり底光があるな」

と、そういう人になつてくださいよ。雲を貫いて、そこから日の光が射してゐるような人  
にね。運命環境はどう変わつたつて、いつもそれはケリがつかない。運命環境如何にかか  
わらない。

水をコップに入れると、コップは丸いから、水は丸くなつていく。これをずっと入れて  
いくと、今に溢れる。器に、運命環境に従いながら、溢れていくような人にならなければ  
ダメです。自由といふと、すぐぶつ壊すようなことを言つてゐるけれども、そうではない  
んだ。そこに従いながら、そこに溢れていく。

そこで、「キリストの靈生」という詩を読んでみます。（割愛。小池辰雄著作集第八卷『詩歌集』

